

## 子どもの関心・意欲を育てる 社会科授業構成と実践分析 (VI)

——小学校4年「嬉野台地の開発」を事例として——

原田 智 仁 岩田 一 彦 草原 和 博  
(兵庫教育大学)  
進藤 憲 司 大西 誠 一 大橋 尚 人  
(兵庫教育大学) (中番小学校) (黒田小学校)  
吉田 典 之 堂本 大 明  
(楠丘小学校) (社中学校)

本研究は、関心・意欲を育てる授業設計・実践・授業分析・評価方法の開発を目的としている。この目的を達成するために、関心・意欲はどのような社会科授業設計および実践の中で育てることができるのか、また、関心・意欲の視点から、授業分析をしたり評価をすることは、どのようにして可能か、を解明してきた。

本研究では、単元の学習内容に関する関心・意欲を計るため、プリ・テスト、毎時間毎の振り返りカード、単元途中と単元最後の感想文、を検討の材料とした。それらの材料を使って、関心・意欲の成長過程とその成長要因を、分析検討した。その結果、「体験的活動→調べ活動→人物への共感→意思決定という一連の単元展開が、子どもの関心を喚起し、同時に認識内容を深化・拡大させる、また認識内容の成長が、子どもの学習意欲を持続させる」という関係が、明らかとなった。特に、授業における認識内容の変化とその理由を綿密に捉えることができたのが、本研究の成果である。

キーワード：関心、意欲、社会認識、社会科授業、評価、指導要録、開発

---

原田智仁、岩田一彦、草原和博：兵庫教育大学 社会系教育講座，〒673-1421 兵庫県加東郡社町山国2013-4

近藤憲司：兵庫教育大学 附属小学校，〒673-1421 兵庫県加東郡社町山国

大西誠一：小野市立中番小学校，〒675-1308 兵庫県小野市中番

大橋尚人：三木市立黒田小学校，〒673-0403 兵庫県三木市末広

吉田典之：黒田庄町立楠丘小学校，〒679-0313 兵庫県多可郡黒田庄

堂本大明：社町立社中学校，〒673-1431 兵庫県加東郡社町

**Development and Analysis of Social Studies Lesson for  
Promoting Children's Interest and Volition (VI) :  
In the Case of "Cultivation of Ureshino Heights" in the 4th Grade**

**Tomohito Harada, Kazuhiko Iwata, Kazuhiro Kusahara,**  
(*Hyogo University of Teacher Education*)

**Kenji Shindo, Seich Onishi,**  
(*Hyogo University of Teacher Education*) (*Nakaban Elementary School*)

**Naoto Ohashi, Noriyuki Yoshida, and Daimei Doumoto**  
(*Kuroda Elementary School*) (*Kusuoka Elementary School*) (*Yashiro Junior-High School*)

This study is a continuation of Development and Analysis of Social Studies lesson for promoting Children's Interest and Volition(I)(II)(III)(IV)(V), which have been made clear that children's Interest and volition can promote through enriching children's social cognition, and promoted children's interest and volition can enrich children's social cognition. The purpose of this article are also to develop and analyze social studies lesson for promoting children's interest and volition, and to develop a method that analyze and evaluate social studies lesson from a point of promoting interest and volition.

The hypothesis in this study is children's interest and volition can promote through enriching children's social cognition, and promoted children's interest and volition can enrich children's social cognition. Based on this hypothesis, we developed a lesson of "Cultivation of Ureshino Heights" in the 4th grade, and then analyze this lesson and Children's understandings, interests and volitions.

As a result of this study, it has been made clear that our hypothesis is valid.

Key Words : interests and volition, social cognition, social studies lesson, evaluation,  
the SHIDOUYOUROKU (the course of evaluation) in 1991, cultivation

Tomohito harada, Kazuhiko Iwata, Kazuhiro Kusahara : Department of Social Science, Hyogo University of Teacher Education, Shimokume, Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-1421, Japan

Kenji Shindo : Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education, Yamakuni, Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-1421, Japan

Seich Onishi : Nakaban Elementary School, Nakaban, Ono, Hyogo 675-1308, Japan

Naoto Ohashi : Kuroda Elementary School, Suehiro, Miki, Hyogo 673-0403, Japan

Noriyuki Yoshida : Kusuoka Elementary School, Oka, Kurodanosho, Taka-gun, Hyogo, 679-0313, Japan

Daimei Doumoto : Yashiro Junior-High School, Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-1431, Japan

## 1. 序

本研究は、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析—3年「社町の桃づくり」を事例として—〈1〉、同（Ⅱ）—小学校4年の「山地の人々のくらし—安曇野（穂高町、豊科町）に湧く良質で豊富な水を生かしたくらし—」を事例として—〈2〉、同（Ⅲ）—小学校3年「ひとびとのくらしと商店—買物を10倍楽しむ方法—」—〈3〉、同（Ⅳ）—小学校4年「菊づくりに生きる沖繩の人々」を事例として—〈4〉、同（Ⅴ）—小学校5「ビデオ『杉原紙』を作ろう」を事例として—〈5〉、の継続研究である。これらの研究では、認識内容を深めてゆくことが、関心・意欲を育てるものである、との研究仮説のもとに研究を進めた。

これまでの研究成果から、認識内容の深まりが、関心の育ちや意欲的な学習活動を保証することが確認された。また、関心・意欲を育てる社会科授業設計と、子どもの評価および授業分析の基本型を作ることができた。

本研究では、関心・意欲を育てる授業実践の結果、子どもにどのような関心や意欲の育ちがみられるか、関心・意欲の成長過程とその要因に絞って分析検討を試みた。

### 〈問題意識〉

関心・意欲を育てようとする授業実践において、子どもは実際どのように関心・意欲を伸ばしているか、また関心・意欲を育てることに成功したのはなぜか。学習成果とその成長過程を追求することによって、本問題を説明してゆく。

### 〈研究仮説〉

単元に、体験的活動、調べ学習、人物への共感、意思決定の過程を適切に組み込めば、子どもの関心・意欲を効果的に伸ばすことができる。

### 〈研究方法〉

- ① プリ・テスト、単元途中と最後の感想文の分析を通して、関心とそれに関わる学習成果を分析検討する。
- ② 毎時間の振り返りカードを分析して、関心の成長とその要因を明らかにする。
- ③ プリ・テスト、単元途中と最後の感想文の分析を通して、意欲とそれに関わる学習成果を分析検討する。
- ④ 毎時間の振り返りカードを分析して、意欲の成長とその要因を明らかにする。
- ⑤ プリ・テスト、単元途中と最後の感想文を分析して、子どもの価値判断の変化と、授業設計との関係を論証する。

本研究では、以上の手続きをもって、関心・意欲の育ちをいっそう緻密に追いかけるとともに、関心・意欲を育てる授業実践を開発、分析した。

授業設計に際しては、子どもにとって身近な生活地域であり、直接観察が可能な嬉野台地を学習対象に取り上げた。そして、台地の水利事業と、それに伴う生活の変

化を捉えさせることで、地域開発の目的や意味、社会的影響に関心をもたせ、問題追求の意欲を育てようとした。

関心、意欲の評価においても、これまでに開発してきた研究手法を、さらに洗練させた。（草原和博）

## 2. 授業構成の実際

### 2.1 教材解釈

子どもたちは、これまで社会科学習で健康を守る活動としてごみ処理の学習を、また安全を守る活動としては消防の仕事を学習してきた。これらの単元では、身近な地域の様々な活動が、人々のくらしをよりよくしていくために営まれていることを学んだ。そして「ごみは有料化すべきか」、「学校で一番危険な場所はどこで、どのように消火するのか」という問題にも、積極的に取り組んできた。

次に、兵庫県の学習では、方言を調べたり他地域の子ともと交流をすることで地域間のつながりを感じていった。さらに、国内の特色ある地域のくらしとして、高冷地の生活や雪国のくらしを取り上げ、人々の工夫や苦勞を知り、これらの地域では自然条件や社会条件を生かしたくらしが営まれていることを学習してきた。また、身近な地域の学習を発展させて、「嬉野村では農業と観光開発のどちらが発展していくか」、「雪国の人はこの場所に住み続けていきたいか」という問題も考えてきた。

以上の学習を通して、子どもたちは、地域社会がそれぞれ結びつき合って成立していることを学び、また、人々のくらしが地形や気候などの自然条件を克服したり生かしたりしながら営まれていることをつかんできた。そして、学んだ事象を相互・因果的に関連付けながら自らの社会的判断を行ってきた。

本単元「きょう土を開く」では、嬉野台地の開拓に貢献した水利事業である、鴨川ダムの建設を取り上げる。嬉野台地では、明治時代の入植から始まり、大正・昭和初期、そして戦後満州からの引き上げ者の手による開拓へと続いた。もともとこの地域は、地形的に水利条件が悪く、水は天水に頼るか、自力で井戸を掘るかで確保してきた。それが昭和8年には、昭和池が築造され、低位段丘では池の水を利用できるようになった。さらに嬉野台地の水田化を促したのは、大正期からの周辺住民の願いであった鴨川ダム（東条ダム）の建設であった。

しかし、このダムの建設に当たっては、湖底に沈んだ土井部落の存在を忘れてはならない。永年住み慣れた土地、先祖からの田畑・墓地を手放すことになった人々の苦悩は計り知れない。それは、その一人藤原さんが「その無念さは筆舌に表しがたい」と述べられていることから伺い知れる。

これらの土井部落の人々の犠牲の上で、昭和22年国営東条川農業水利事業と称するダムの建設（昭和26年

竣工)が始まった。このダムの完成(昭和30年)により、地域住民ことに台地上の人々の永年の望みであった用水が確保された。岸上さん(戦後引き上げ、入植)の「ほんとにうれしかったなあ」との言葉には、当時の人々の喜びを、ひしひしと感じ取ることができよう。

以上の経緯を経て、嬉野台地の灌漑が可能になり水田が広がっていった。これらの事実をもとに、身近な地域の開発の様子を捉えていくことは、開発のために尽くした人々の苦労や工夫を考えてゆく上で有意義であると考ええる。また、現在の状況・環境が形成されてきた経緯を理解するのも有効であろう。また、地域の発展の歴史を学んだことをステップにして、今後の地域開発の在り方を考えられることを願う。

本単元「きょう土を開く」は、子どもたちの間で以前から嬉野台地の水利について関心が高かったことを踏まえ、設定されたものである。単元の導入では、用水路を辿ることにより、鴨川ダムの存在や意義を見い出させたい。展開部では、ダムの建設に当たった土井部落の人々の苦悩や苦労を、また一方では、ダムによって恩恵を与えられた台地の人々の思いを捉えさせたい。そして、一連の学習を通して、地域の発展がこれらの苦労や努力の積み重ねによって成り立っていることをつかませるようにしたい。終結部では、学習した内容を応用して、現在の他のダム建設についても子どもの判断を求めたい。

これらのねらいを具体化すべく、単元は、本校社会科で採っている基本的な学習過程、1)触れる段階、2)調べる段階、3)関わり方を考える段階、に沿って構成した。また、各段階の学習課題として、触れる段階には「嬉野台地の開拓はどのようにされたのだろうか?」、調べる段階には「なぜ土井部落をダムの用地に選んだのか、ダムのために土地を移転することはいいか?」、関わり方を考える段階には「現在のダムはどうかされているか?」の各問いを、それぞれ設定した。

## 2.2 単元の指導

### 2.2.1 単元の目標

- ・嬉野台地の開拓に尽くした先人の苦労や開墾の工夫、水利の状況、ダムにより水没する土井部落の様子などを、意欲的に調査することができる。
- ・嬉野台地が明治期から段階的に開拓されていった発展の歴史と鴨川ダムの建設が地域の灌漑を可能にしたことを、理解することができる。
- ・嬉野台地の開発に携わった先人の生活の安定・向上への願いや移転を余儀なくされた土井部落の人々の苦悩に触れ、人の営みを共感的に理解することができる。
- ・嬉野台地の開発が、先人たちの努力の積み重ねの上に成り立ってきていることを知り、これからの嬉野台地の発展を考えることができる。

### 2.2.2 単元計画(全17時間)

オリエンテーション=2時間

第1次=4時間

第2次=8時間

第3次=3時間

2.2.3 学習過程

学習過程	学習課題	学 習 活 動	教師の働きかけ
オリエンテーション	2 時間	○嬉野台地の地形の様子を観察してつかむ。	・嬉野台地を見学調査し、台地の地形の様子やため池・用水路の様子をつかませ、昔の開拓について知らせる。
触れられる	第一次 4 時間	○昔の人の嬉野台地の開墾の様子を調べる。 ・開墾の様子の変化・方法・担い手 ○なぜ嬉野台地を開墾したのだろうか考える ・台地の発展の様子 ・台地の開墾への思い ○昔の人は開墾した田畑で作物を作るため必要な水はどこから手に入れたか考える。 ・天水・地下水・ため池・ダムの用水 ・鴨川ダムからどうやって水が来ているか	・開墾の様子を調べさせ、昔の人の開拓に込めた生活安定への願いを捉えさせる。 ・開墾をした理由を考えさせ、岸上さんから聞くことで、嬉野台地の発展の様子をつかませる。 ・開発や水利に関する情報を実地調査、体験、資料、地形図などからつかませ、水を手に入れることの重要性に気づかせる ・鴨川ダムの作られた場所をみていくことで、土井部落が水没したことを知らせ、作られた場所にふれていき、学習課題を捉えさせる。
調べ	第二次	○鴨川ダムの作られた理由を調べる。 ・作られた場所・自然条件（地形・気候） ・作られたわけ・関わった人・組織 ・歴史・社会条件（食糧増産政策） ○ダムにより移転した土井部落の人々の思いを藤原さんの話からつかむ。 ・移転の交渉の経緯 ・土地を手放し、水没する部落への思い ・ダムにより台地上の灌漑が可能になる	・鴨川ダムが作られるにあたっての地形の良さ、わけ（用水の確保・戦後の食糧増産政策）、建設の歴史、関わった人や組織などを調べさせる ・鴨川ダムの建設に関して人々の願いとまた水没する土井部落の人の思いを考えさせ、水を手に入れるための努力と苦悩をとらえさせる。 ・当時の人々の開拓の苦労や水への願いからダムの役割を考えさせるとともに、水没して移転する人々と台地の人々を結びつけて考えさせる
る	8 時間	○鴨川ダムを作るため立ち退いた人にとってはどんな思いで移転したのか、また、嬉野台地の人にとっての水利への願いをもとに、開発の意義を各自判断し話し合う。 ・土井部落の人々の思い ・台地を開拓した人の苦労、作物生産への願い ○嬉野台地の水利のよりよいあり方を考える	・当時、土井部落の人と嬉野台地の人々の思いや開発の役割から、双方の立場をふまえたダムの役割、立地についてその是非を判断させる。 ・鴨川ダムができたことが嬉野台地を灌漑し、多くの人々に水田耕作を可能にしてきたことをふまえた上で、ダムに反対してきた人たちの思いを汲んでいったか検討させ、水利のよりよいあり方を資料や体験をもとに考えさせる。
関わり方を考える	第三次 3 時間	○現在の嬉野台地ではダムが必要か。また、他に水を得る良い方法はないか考える。 ○現在のダムの開発では、できるのがよいかどうか考える。 ・開発の必要性 ・開発の問題点	・社会情勢が変化し、減反などで水田の減少がみられる現在にあつての、ダムの役割や必要性を考えさせる。 ・現在の他の開発の事象に関して、その善し悪しを資料をもとに考えを交流させ、開発のもつ必要性や問題点を考えさせる。

図1 「きょう土を開く」の学習の流れ（全17時間）

5. 本時の学習 (第2次 5時)

(1) 目標

- 嬉野台地を田へ変換した先人達の苦労やダム建設のため余儀なく移転された土井部落の人々の苦悩の思いを意欲的に考えることができる。
- 嬉野台地の多くの土地の灌漑が可能になってきた訳柄, 土井部落の人々の生活の様子の変化を知り, 開発のもつ地域発展の意味を考えることができる。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き か け	予 想 さ れ る 子 ど も の 反 応
1. 前時までの活動を振り返り学習の課題をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 鴨川ダムの作られた歴史を振り返らせこれまでの調べ活動をいかし, 自分の考えを確認し, 意見を発表させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 昔から考えられてきたダムがいよいよ造られるが, 土井部落が湖底に沈んでしまうことになった。</li> <li>• 考えを発表するぞ。</li> </ul>
<p>学 習 課 題 : ダムのため土地を移転することはいいか?</p>		
<p>2. 鴨川ダムが土井部落に作られ, 土地を移転することがよいか, 話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 土井部落の人の立場</li> <li>• 台地の人の立場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ダム建設が, 土井部落の人, 台地の人々にとってどんな意味があったか, それぞれの立場に立って考えさせる。</li> <li>• 立ち退きになった土井部落の人々にとって交渉は納得いくものであったかどうか考えさせることで, 土井部落の人の生活の様子, 思いを捉えさせる。</li> <li>• 嬉野台地の人々は, ダムができると水が安定して得られるようになることから, ダム建設の意味をつかませる。</li> <li>• それぞれの立場の考えを交流させ, ダムの建設に伴う当時の人々の苦悩や開拓への思いを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 台地の人々の水を手に入れたい願い。</li> <li>• 土井部落の人にとって, 土地を手放すのはつらかった。</li> <li>• 立ち退きたくなかったが, 補償交渉の結果, 仕方がなかった。</li> <li>• 台地で米を作りたいという願いのためにどうしてもダムの水が欲しかった。</li> <li>• ダムができると多くの田が耕作可能になっていくので地域の役に立つ。</li> <li>• 土井部落の人にとっては, つらく苦しい思いがあるが, そのために多くの人々が潤うのでダムは必要である。</li> </ul>
3. 実際にできた結果を知り, 自分の判断がいいか再度考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ダムができた結果, 嬉野台地始め3000町歩の灌漑が可能になったこと, 移転を余儀なくされ7戸が散在しその後の生活の変化など事実を知らせ, 最初判断したことの善し悪しを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• もっといい場所や水源を探し, 土井部落の人が苦しまなくて, かつ台地の人々にも役に立つ方法を考える。</li> <li>• 自分たちの利用できる池を各地域ごとに作ればいい。</li> </ul>
4. 両者の立場をふまえて, 再び, 判断をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 話し合い並びに結果からの自分の考えの最終的な判断をさせるとともに, よりよいあり方を求めようとする態度につなげていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分としては, 土井部落の人の気持ちもわかるが, 水を得るためにダムを造らなければならなかった考えもわかる。</li> <li>• 土井部落の人が納得して移れるようにしてやればよい。</li> <li>• 嬉野台地で適した場所を探して, ため池や用水路を台地の人で作ればいい。</li> </ul>

(近藤憲司)

### 3. 関心・意欲の評価

#### 3.1 関心の評価

##### 3.1.1 関心の定義と評価方法

本研究では、関心を問題関心としてとらえ、その成長過程を授業との関連において明らかにしようとした。

子どもの関心は、どんなことから出発し、どのように変化していったかを、学習毎に書かせた振り返りカードの記述内容から読みとることとする。7名を抽出し、子どもの関心の対象や変化の様子をまとめたものが表1である。この表から、以下のことが言えよう。

- ①関心が集約される傾向にあるのは、12時間中9時間であり、単元の中心的段階である第2次においては、2ないし3時間の連続的な追究がみられる。
- ②関心が拡散する傾向にある、あるいは不明瞭なのは、1/24（1月24日のこと。以下同様に略記）、1/29、2/17の3時間である。
- ③1/26は、4W（いつ・どこ・誰・何）に関わる単一の事実、あるいはそれらの相互関係に関心を抱く傾向にあり、1/17、1/23は、嬉野台地の開発の目的に関心を示している。1/27には、前時までの関心が、台地の開発と鴨川ダム建設との目的一手段関係へと発展している。さらに、1/31～2/13になると、鴨川ダム建設の是非に関心が向いている。

##### 3.1.2 関心とその成長過程

次に、子どもの関心と学習内容が、どのように変化、成長していったか、その過程を考察したい。

まず、①のように、第1次から第3次における学習課題「嬉野台地の開拓はどのように進められたのだろうか」、「なぜ土井部落をダムの用地に選んだのか、ダムのために土地を移転することはいいか」、「現在のダムはどうかかされているか」に沿う形で子どもの問題関心が集約している理由を、学習過程との関わりで説明する。

##### ○1/16の場合

6名の子どもの関心が、開拓の様子に向けられている。これは、オリエンテーション時に嬉野台地の現地調査を実施し、ため池や用水路の多さに注目させたこと、また観察結果を踏まえて、台地の開拓目的を子ども達に推理させたことの成果と考えられる。

##### ○1/17、1/23の場合

開拓したわけに関心が集約され、2時間にわたる追究をもたらしている。これは、子どもたちが、前時の調べ学習の内容から、特に台地の土地利用の変化（針葉樹林→畑→田）に注目していったことの影響と考えられる。また、その結果、子どもの間で「せっかく畑として開墾したのに、また田につくりかえたのはどうしてだろう?」という問い（なぜ疑問）が、自然に共有されるようになったことも、関心が集約した理由として指摘できよう。

##### ○1/28の場合

子どもの関心は、土井部落を鴨川ダム建設用地として選んだわけに集中している。これは、ため池や井戸だけでは、3000町歩もの灌漑用水を確保することはできない事実、またダムを建設するために土井部落が水没した事実を教師が示唆したことで、「なぜ、村を沈めなければならなかったのか」という子どもの関心（なぜ疑問）を浮き彫りにすることができたためと推察される。

##### ○1/31～2/13の場合

単元の山場を迎え、子どもの関心は、本単元で探究されるべき最も本質的な問い「土井部落の人々は立ち退くべきか」に集約されている。そしてこの問いは、3時間という比較的長いスパンで追究されている。これは、開墾に労を費やしダム建設を待ち望んできた嬉野台地の人々と、ふるさとを捨てることになった土井部落の人々との間に子ども自身が立って、一連の社会事象を自らの問題として捉え直すことができたためであろう。子どもにとって切実な関心にまで高めることができたのは、開拓に関わった人々の苦労や工夫、土井部落に住んでいた藤原さんのふるさとへの思い、開発を心から願う人々の生き様に触れ、それぞれ人々の考え方を子どもが共感的に理解しようとしたためと考えられる。

また、子どもの関心は、③に示したように、「いつ、どこを、誰が、開拓したか」、「どのように開拓したか」という断片的な事実や相互関係を探るものから、開拓のわけがらや鴨川ダム建設のわけがらに関わる因果関係へと成長している。そして、この知的関心は、鴨川ダム建設の是非に関わる価値判断へ、さらには、岐阜県の徳山村ダム建設の是非といった開発一般の問題に対する価値判断へと発展、成長している。

このような関心の成長過程から考えて、本単元の3つの学習課題の配列が、ダム建設の意味や開発の在り方を長いスパンで探究させるのに効果的だったことが推察できよう。

以上、子どもの関心の内容とその成長過程について、学習過程との関わりで考察してきた。考察の結果、ねばり強く子どもの関心を持ち続けさせるのに有効な条件は、以下の4点であることが明らかとなった。

- ・見学調査などの体験的活動を導入時に組み込むこと。
- ・見学調査を踏まえて、調べ活動を行わせること。
- ・岸上さん、藤原さんという人物の生き様との出会い。
- ・子どもの問題関心を、より本質的なもの（なぜ疑問と意思決定）へと向かわせる資料の配列（開拓の変化→大規模な水田開発→土井部落の水没→台地の開拓者と土井部落の人々、双方の考え方）。

しかし、子どもの認識内容が毎時間ごとに集約されることそれ自体の妥当性や、②でも指摘したように、子どもの関心が拡散することを防ぐ教師の関わり方については、今後の課題としたい。（吉田典之 大橋尚人）

表1 子どもの「関心」内容とその変化の分析資料

授業日 と 児童名	第1次				第2次						第3次	
	1/16	1/17	1/23	1/24	1/27	1/28	1/29	1/31	2/5	2/13	2/14	2/17
R・U	開拓の様子 開拓の方法	開拓したわけ	開拓したわけ		水はどこから きたのか, 鴨川ダムを造っ たわけ	土井部落をダ ム用地に選ん だわけ	いい資料づく りをする	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか		郷土を開く
K・F	開拓の様子	開拓したわけ	開拓したわけ		鴨川ダムを造っ たわけ	土井部落をダ ム用地に選ん だわけ		鴨川ダムを造 るべきか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	鴨川ダムを造 るべきか	徳山村ダムを 造るべきか	郷土を開く
M・Y	開拓の様子	開拓後のくら しなどの変化			鴨川ダムを造っ たわけ		土井部落の人々 は立ち退くべ きか				徳山村ダムを 造るべきか	
M・T	開拓の様子	開拓したわけ	開拓したわけ	水の確保の方 法	鴨川ダムを造っ たわけ		VTR「藤原 さんの話」を しっかり見る	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか		地域社会をよ りよいものに するために
T・K	郷土を開く		開拓の方法や 当時の暮らし の様子	郷土を開く	鴨川ダムを造っ たわけ	ダムの作り方						
T・M	開拓の様子		開拓したわけ		鴨川ダムを造っ たわけ		郷土を開く	土井部落の人々 は立ち退くべ きか		土井部落の人々 は立ち退くべ きか	徳山村ダムを 造るべきか	地域社会をよ りよいものに するために
S・M	郷土を開く		開拓したわけ		鴨川ダムを造っ たわけ	土井部落をダ ム用地に選ん だわけ	郷土を開く	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか	土井部落の人々 は立ち退くべ きか		地域社会をよ りよいものに するために



## 3.2 意欲の評価

### 3.2.1 意欲の定義と評価方法

本研究では、「意欲」を「こどもが社会事象についての研究活動を積極的・継続的に行おうとしている状態」と定義した。

この定義にもとづいて、子どもが学ぼうとしている事象の量と質を分析し、幅広い事象を深いレベルまで探究している子どもを「意欲の高い子ども」と評価した。意欲を評価する方法としては、子どもの研究成果が記述されている学習ノートの内容を分析することにした。ノートに表現された内容に基づき、子どもはどのようなことを調べ、どのような思考をしたのかを捉えようというわけである。それを整理したものが表2である。

本単元「郷土を開く」の場合、郷土の開発に伴うダム建設の是非を問うことが、単元における中心的課題となっている。したがって、第2次の「ダムのため、土地を移転することはいいか」に対する子どもの判断理由の内容を考察し、それを評価することにした。

### 3.2.2 意欲とその成長過程

学習前の課題「ダムは、作るべきか？」に対する子どもの主な判断根拠は、「飲み水のため」「田ができる」「工場に必要」「自然破壊」「村の沈没」「生活向上のため」「水害防止のため」の7項目であった。

この段階の判断は、具体的な事実や事象に基づくものではなく、子どもの既存の知識や経験に依存したものである。またその判断も、「飲み水が必要だから、ダムが必要である」、「山をくずして自然破壊をしてしまうからダムを作らない方がよい」などの単一の理由をもとになされているにすぎない。

すなわち、単元の学習に入る直前の子どもの「意欲」は、質・量の両面で、まだ低いレベルに留まっているといえる。

一方、第2次の課題「土井の人は立ちのくべきか？」に対する主な子どもの判断根拠は、「水不足」「田畑に必要」「家屋の水没」「補償問題」「ふるさとへの思い」「国の命令」「公共の利益」「戦時中の食料不足」の8項目であった。

この段階の判断は、嬉野台地に住み開拓してきた岸上さんの願いや水没する土井部落に住んでいた藤原さんらの思い、当時の社会的背景や移転に伴う補償問題など、具体的かつ客観的な事実を根拠にした判断となっている。例えば「台地は、雨が少ない」、「大干ばつがあった」、「補償を1200万円要求したのに800万円になった」、「土井の人には思い出がいっぱいある」、「ダムができてうれしい、田んぼが作れる」、「わがふる里と言っていた」などの記述内容は、それを典型的に表している。また、ほとんどの子どもが、判断の根拠として上記の項目の3つ以上を指摘しており、事実、事象が総合的に判断され

ていることがわかる。最も数多くの根拠を挙げた児童の場合（NO.22）、その数は7項目に及んでいる。

以上のことから、第2次「土井の人は立ちのくべきか」における学級全体の「意欲」は、オリエンテーション時と比較して、量・質ともに相当の育ちが認められるといえよう。

では、学級の中でも意欲の高まりが顕著な児童を手がかりにして、その原因を探ってみよう。

H児（NO.12）は、学習前の「ダムは作るべきか」の問いに対しては、「全然知らないので、わからない」と答えている。

しかし、第2次「土井の人は立ちのくべきか」の学習では、ダムは「作る方がよい」と答えている。その理由として、24箇所もため池ができたのに、その後も年表に「大干ばつがあった」という事実をあげている。また、ダムができることによって、水没する故郷への思いを捨てきれない村人にも、一定の理解を示している。そして、最終的には、これらの事実を総合的に勘案して、「国の人々が1200万円あげたら土井の人も許すし、国も喜ぶ」だろうと判断している。

H児の成長過程は、当時をよく知らない状況にあっては、当然、意欲的に判断することはできず、逆に、意欲的に判断させようとするれば、多面的に状況を捉えたり、当事者の気持ちを共感的に理解する場を設けることが必要であることを示している。

以上の分析結果から、本単元の学習過程には、水を得ることで豊かな暮らしを望む岸上さんらの願いや（第1次）、ダムのために移転を余儀なくされた藤原さんらの思い（第2次）が適切に位置づけられていたことが明らかとなった。また、これらの学習内容をしっかりと習得してゆく過程で、子どもの学習意欲も高まってゆくことが確認された。（大西誠一 堂本大明）

## 4. 判断の変化と認識内容

本単元では、鴨川ダムの建設によって初めて嬉野台地の開発が可能になったこと、またその反面、長年住み慣れた土地がダム湖に水没してしまい、離村せざるを得なくなった人々がいたことを学習した。果たして、鴨川ダムは建設すべきであったのか、否か。それについて子どもたちは真剣に考え、各自の判断を下していった。そうした社会的な価値判断を下すことと、学習対象への関心や認識とはいかなる関係にあるのだろうか。ここではこの問題を考察する。

### 4.1 判断の変化

単元を通じて、オリエンテーション時、第2次終了時、単元終了時の3回、子どもの判断を問うた。それは、①ダムは造るべきであった、②ダムは造るべきでなかった、③どちらともいえない、の三つから各自の判断を選択さ

表2 ダム建設に関わる子どもの判断理由における「意欲」の分析資料

児童	オリエンテーション時におけるダム建設の判断理由 「ダムは、作るべきか？」	第2次学習時における鴨川ダム建設の判断理由 「土井の人は、立ちのくべきか？」
1	・夏、飲み水が少なくなる	・お金はどこのお金か ・村や町はお金がない ・ダムを作らないと水が少ない ・台地は、雨が少ない ・大干ばつがあった ・急にダムになるのはいや
2	・飲み水がなくなる ・近くの家が沈む	・日照りで井戸の水が少なかった ・土井は沈んだけど、水に不自由しなくなった ・井戸から水を持ってきた
3	・飲み水や田んぼのために人が苦労する	・大干ばつがあったが、ダムができて大干ばつがない ・田畑に水が行き食べ歩いてける ・戦争の中で食料が不自由 ・故郷も大事だが命はもっと大切 ・雨が少ない
4	・飲み水、田んぼができる	・土井は雨が少ない ・播州地方に大干ばつがあった(年表) ・国の命令だからしょうがない
5	・自然を守る ・不足の水は他からもらう	・大干ばつでお米ができなかった ・戦争で米に不自由していた ・国が頼んでいるから
6	・自然がくずれる ・水が町をおそうかも	・ダムを作るとその土地がぐちゃぐちゃになる ・ため池と川がある ・町や村の人が怒る ・お金はどこにあるのか ・鉄ができて、水がもれて鉄がとぶと危ない 池や川があるから生きられる ・ダムは土地が狭くなり、土地がつぶれてしまう ・ダムを作ると生きられない
7	・田んぼや工場に水がいる	・米をいっぱい作ることができる ・野菜よりもうかる ・大干ばつをなくす ・思い出の場所は無くなるが、国のため ・ため池を作る ・米が少ない
8	・村がなくなる ・音も大きい	・国は米を多く作るためと命令し、たくさん欲しかった ・土井の人は立ちのくのがいやだった
9	・山をくずして自然破壊をしてしまう	・水、雨、お米が少ない ・国から作るように言われている ・大干ばつがなくなる ・多くの人に役に立つ ・米が必要
10	・自然が無くなるが、生活のため	・藤原さんは「わが故郷」という言葉で ・24箇所のため池があったが、干ばつが多い ・もっと多くのため池を作ればよい
11	・引っ越しがある ・田が作れない	・補償を1200万請求したのに800万になった ・柱に体をくくりつけ、「村に残りたい」という人もいた ・干ばつになる ・戦争で負けたから「米を作れ」という命令があるからしょうがない ・うれしの台は雨が少ない
12	・全然知らない	・国の人が1200万円あげたら土井の人も許すし、国も喜ぶ ・24箇所にため池ができたのに、大干ばつと年表にある ・国からの命令もある ・家の柱に体をくくりつける ・国から言われても自分の故郷である村を離れられない
13	・田んぼの水や飲み水になる	・大勢の人の所に水が行く ・干ばつ続きで水が少なくなっている ・戦争が終わってすぐだから
14	・ダムが水害から町や村を守る	・住んでいた所がダムになるのはいや ・ダムをつくらないと米ができない ・水が必要だが雨が少ない
15	・生活が豊になる ・住んでいた所が沈む	・終戦後、大干ばつで生きていくためには水が必要 ・土井の人は思い出がいっぱいある ・田、米が必要 ・国の命令 ・多くの人に役立つ
16		
17		
18		
19	・村が水に沈む ・田の水になる	・立ちのくれないといけないう ・お金で解決しようと800万示した ・ダムを作るなら一緒に死ぬ人もいる
20	・飲み水がなくなる ・作物のため水が必要	・台地に水が来る ・大干ばつがうれしの台地にあったが、ダムができてからはなくなった
21	・飲み水、田、工場が困る	・雨が少なかったが、生まれた場所がダムになるのはいやだ。柱に体をしぼって死んだ土井の人もいる
22	・ダムで家がなくなる人がいる問題がある	・自然を守る ・補償が十分でない(お金) ・故郷への思い(先祖のお墓、思い出、離ればなれ) ・水がいる(水がない) ・田んぼ、お米がいる お米を作りたい人) ・立ち退きたくない人 ・国からの命令(戦争) ・多くの人(4000人)に役立つ
23	・森がコンクリート固めになり音がうるさい	・他の部落の人たつに迷惑をかけないで、台地だから掘って作ればよい
24	・田や飲み水が不足する	・土井は思い出がいっぱいあった所 ・ダムは人のためになり、お米が作れる
25	・田や工場によい ・村の人も巻き込まれる	・藤原さんが「我が故郷」と言っていた ・先祖代々の村を守りたい ・移転交渉に書いてあるように、政府もあきらめない(毎日の話し合い) ・政府も国から米を作れといわれている ・多くの人に役に立つ ・ため池をつくれればよい ・うれしの台の人は自分らの所で田が作られる
26	・田や飲み水が不自由 ・人の迷惑になる	・1200万を要求したが800万しかもらえなかった ・全家が「黒谷に行きたい」と言っていたのに天神1軒、常田に1軒と離ればなれになった ・水に不自由ない土井の人には関係ない ・土井はため池、田んぼ、畑も普通 ・国は米がなくて大変、国は借金をしてしまう
27	・田、飲み水がある ・町村、花木がなくなる	・飢え死にするより立ちのく方がよい ・水が飲める ・野菜やお米が食べられる ・ダムがないと大干ばつになる
28	・田んぼや飲み水が不足する	・故郷が大事な人もいるし、田んぼを作りたい人もいる ・「自分もしずむ」(藤原さん) ・「ダムができてうれしい、田んぼが作れる」(岸上さん)
29	・生活の向上	
30	・田んぼ、工場、飲み水のため ・町がなくなったり、そこに住めない	・ダムは田んぼのためになる ・雨が少なかった ・ダムを作ったら干ばつがなくなった
31	・自然がよごれる ・水を貯める場所が必要	・ダムを作らないと田が作れない ・土井部落についての思い出がある ・土井部落だけが自然がなくなる ・池はすぐに水が少なくなってしまう ・村や町の人困る
32	・田や工場に役立つ ・村の人が困る	・お米をつくりたい ・村から離れたくない人もいる ・戦争でお米が足りないから
33	・自然に悪い ・田や飲み水に困る	・引っ越しをしなくてはならない ・田ができない ・多くの人に役立つ ・水が必要(大干ばつをなくす) ・故郷を離れたくない ・国の命令 ・米を作りたい
34	・住む所がなくなるが、田や工場に水が行く	・ため池を作ったらい ・多くの人のために役に立つ ・お米もいっぱい作れる ・大干ばつもなくなった

せ、その理由を自由に記述させるという形式をとった。  
その結果、次のような回答を得た。

ダム建設の価値判断	1回目	2回目	3回目
①ダム建設に賛成	13	15	8
②ダム建設に反対	4	3	7
③ダム建設に中立	17	16	19

1回目・2回目ともに、ダム建設に賛成の者と中立の者がほぼ同数を占めたが、3回目になると賛成派は半減し、逆に反対の者と中立的立場の者が数を増やした。この判断の変化は、授業展開にともなう子どもの認識内容の変化とどのような関連にあるのだろうか。後に分析してみたい。

次に、子どもの判断の変化を表にすると、以下のようになる。なお、数字は回答数を示している。

①→①→①	3	②→①→①	0	③→①→①	3
①→①→②	1	②→①→②	0	③→①→②	0
①→①→③	1	②→①→③	2	③→①→③	5
①→②→①	0	②→②→①	0	③→②→①	0
①→②→②	1	②→②→②	1	③→②→②	1
①→②→③	0	②→②→③	0	③→②→③	0
①→③→①	1	②→③→①	0	③→③→①	0
①→③→②	1	②→③→②	0	③→③→②	2
①→③→③	4	②→③→③	1	③→③→③	6

〔注：①ダム建設に賛成，②反対，③中立，を指す〕

ダムを造ることに最初から最後まで一貫して賛成の立場をとる者は3名、反対する者は1名、中立の者は6名であり、合わせて全体の3分の1弱を占めるに過ぎない。残りの3分の2は賛成と反対の間を揺れ動いている。しかし、賛成から反対に回る者はいない。多くは揺れ動いた末に中立になっている。このことは何を意味するのだろうか。これについても、後ほど分析する。

#### 4.2 認識内容の変化

単元展開につれて、子どもの認識内容はどのように変化したか、判断の変化と認識内容との関連を考察するためには、まずはこの問題を明らかにすることが必要である。そこで、各段階の判断理由を分析することにする。

##### 4.2.1 1回目の判断理由に見る認識内容

オリエンテーション時の調査における判断理由を、立場ごとに分析すると、次のようになる。なお、数字は延べ回答数を示す。

全般に記述の量は少なく、理由も単純明快なものが多い。例えば、賛成の立場をとる者の中で、「自然はなく

賛成	生活用水（飲み水）が得られるから	13
	農業用水が得られるから	8
	工業用水が得られるから	1
	ダムは貯水機能があるから	1
	ダムは水棲動物のためになるから	1
反対	自然が破壊されるから	2
	ダム建設で騒音が出るから	2
	村がなくなってしまうから	1
中立	用水は確保できるが、村がダムに沈む	10
	用水は確保できるが、自然が破壊される	4
	ダムは便利だが、地震がくれば壊れる	1
	立ち退く人の生活が保障されればよい	1
	まだ学習してないのでわからない	1

なるが、生活ができないから北播にダムを造るべきだ」と、ダムの弊害についての認識を示した上で賛成の意思を表明する者は1名のみである。また、中立の立場に立つ者も、ダム建設の功罪を並べて、どちらともいえないと述べてはいるが、いずれも一般的な発言であり、自らの問題として判断するという姿勢は読み取れない。

##### 4.2.2 2回目の判断理由に見る認識内容

第2次終了後の判断理由についても、同様に分析すると次のようになる。数字は延べ回答数である。

賛成	旱魃防止に役立つ	10
	米不足の解消になる	9
	土井地区の人にも最終的にプラスになる	4
反対	思い出や心の行き場がなくなる	2
	故郷を離れること	1
	溜池がある	1
	米も余っている	1
	土井地区の人が反対している	1
中立	嬉野台には必要だが、土井地区には不要	16
	水田ができる	歴史のある村が水没 故郷の消滅、自然破壊 お金には代えられない
	米不足の解消	
	旱魃の防止	
	ダムは必要だが、補償が不十分	7

1回目比べて記述の量が増えるとともに、より具体的になっており、深い思考の跡を読みとることができる。例えば、賛成の意見にしても、ダムの弊害も考えた上で賛成を表明する者が5名、土井地区の利害よりも多数の人の利害を優先すべきだとする考えに立つ者が9名いる。

とくに後者のうちの3名は「土井の人たちは……自分の土地のことしか考えていない」と直接的に言及し、また6名は「土井の人たちが立ち退くので、多くの人たちに役立つと間接的に表現している。

また、はっきりと反対の立場を表明した者は少ないが、彼らはいずれも土井地区の人々の辛い思いへの共感を第一に考えている。中立の者も嬉野台地と土井地区のそれぞれの願いを理解して、どちらとも態度を決めかねつつ、立ち退きに伴う補償の額の少なさを指摘する意見が多くみられた。これは第2次の学習内容の影響と言えよう。

#### 4.2.2 3回目の判断理由に見る認識内容

単元終了後の判断理由についても、同様に分析すると次のようになる。数字は延べ人数である。

賛成	旱魃防止, 水の確保, 米作りに必要	8
反対	村がなくなり, 思い出がなくなる	2
	今は水が余っている	2
	土井部落の人が困る	2
	一生懸命つくった田畑がつぶれる	1
	金の使いすぎ	1
	立ち退きの補償が不十分	1
中立	1・2回目と同じ理由(功罪半ばする)	19
	昔は役に立ったが, 今はわからない	4
	昔はダムで困った人がいたが, 今はダムで助かっている	1
	鴨川ダムができて困った人がいたが, 徳山ダムができなくて困る人がいる	1
	今水が大切に使われていれば必要だが, 無駄づかいするなら思い出の方が大事	1

賛成理由に関しては全員が表に示した3つをあげている。また、反対理由に自然保護的なものはなくなり、土井地区の人々への共感が目立っている。この他、反対・中立ともに第3次の学習内容を反映して、現在の観点からの批判や、現在のダム利用、あるいは他のダム建設との比較を踏まえた意見が出されている。

#### 4.3 分析結果の考察

まず先に提起した問題から考察しよう。すなわち、回を追うに連れて賛成の立場をとる者が減り、反対や中立の者が増えたのはなぜだろうか。賛成の者の理由を読むと、最初から最後まで大きな違いがない。つまり、一般論に立つ限り、ダムが人々の生活に役立つことは誰もが認めざるを得ないのであり、従ってその理由も大きく変わりようがないと考えられる。しかし、身近な地域でのダム建設によって、実際に村が水没した経験をもつ人々に接すれば、そこに葛藤が生ずるのは自然であろう。

そして、深く考えれば考えるほど、賛成とも反対とも言いようがないことに気づくに違いない。それが、中立の立場が増えた最大の理由といえる。従って、単純に分らないのではなく、情報量が増えて認識が深まったからこそ、態度を決めかねているのだと解される。

例えば、賛成から中立に変わった者は5名いるが、その一人M君は次のように述べる。

<1回目>田の水に使ったり飲み水になって便利だから。

<2回目>せっかく開拓しても水がないと畑や田圃ができないし、今では土井部落の人でも喜んでいる。

<3回目>ダムを造れば農業にも役立つし飲み水にもなる。でもダムを造る所の人の気持ちも考えてあげた方がいい。もしかしたら失敗するかもしれないから。

また、反対の立場から中立へと変わったD君の判断理由は、次のように変化している。

<1回目>村がなくなり行く所もなくなる。音も大きい。

<2回目>造るべきの方は米を作りたい願いがあるし、造らない方は自然を守りたいという思いがあるから。

<3回目>ダムを造る方は仕事・地形・利水という意味があるし、造らない方は自然を守る、立ち退く人の思い、お金がかかる、だからどちらとも言えない。

ここに、授業展開に伴うM君、D君の認識の深まりを見て取ることができる。同時に、認識の深まりはただ情報量の増大を意味するだけでなく、情報を整理し相互に関連づけることも意味することが明らかとなろう。

従来の継続研究の成果を踏まえ、以上の分析結果を総合的に考察すると、子どもの判断の変化の背景に、関心や認識内容の変化を指摘することができる。それゆえ、授業過程に子どもの価値判断を問う場面を効果的に組み込めば、子どもの関心を育てることができ、認識内容を深めることができると言ってよいだろう。(原田智仁)

## 5. 結

本研究の成果を概括すると、次の点が明らかになった。

- ① 嬉野台地を実際に観察するという現地調査が、地形や土地利用という地域の実態を詳細に把握しようとする「関心」を喚起していた。

これは、単元の導入部に体験的活動を配置すれば、子どもの主体的な事実認識が保証されると同時に、その後の長期にわたる探究活動へのきっかけを与えることができることを示唆している。

- ② 嬉野台地の水利事情についての子どもの調べ活動と、教師の適切な指示が、ダム建設の目的や意味、影響を捉えようとする「関心」を喚起していた。

これは、体験的活動の後に調べ活動を配置すれば、子どもの知的探求心が刺激され、単元当初の事実認識を、意味や因果関係の認識へとスムーズに成長させることができることを示唆している。

- ③ 嬉野台地で生活する人々への共感的な理解が、ダム建設の背後にある多様な価値観やその対立関係を追求しようとする「関心」を喚起していた。

これは、単元の展開部で複数の人間の生き様に触れる機会を設ければ、子どもは開発の在り方を自分の思い込みに頼ることなく、社会の複数の価値観や理念から考えさせることができることを示唆している。

- ④ ①～③の過程を踏まえて、ダム建設の是非を意思決定させることが、将来の地域開発のあるべき姿を主体的かつ客観的に判断しようとする「関心」を呼び起こしていた。

すなわち、単元の終結部に意思決定の過程を組み込めば、賛否それぞれの視点から、それまでに習得した知識内容を子ども自身に再構成させることができる。また、社会的な価値判断を求めることは、個人の偏った固定観念から、人々の賛否両論とその合理的根拠へと、子どもの関心を解き放つ上でも効果的である。

- ⑤ 嬉野台地の灌漑の事実を知り、人々の工夫や苦悩を探究する、そして、開発の在り方について意思決定してゆくことが、子どもの学習「意欲」を高めていた。

特に、事実認識から関係認識、価値判断へと至る単元の流れと、それに伴う認識内容の質的・量的な成長が、子どもの学習意欲を持続させていることが明らかとなった。

関心・意欲の育成に関して、今回の研究で新たに得られた知見をまとめるならば、次の2点が指摘できよう。1)体験的活動→調べ活動→人物への共感→意思決定という一連の単元展開が、子どもの関心を喚起し、同時に認識内容を深化・拡大させる。2)また認識内容の成長が、子どもの学習意欲を持続させる。

今回の研究で明らかになった成果を、他の実践で検証してゆくことが、今後の課題である。(草原和博)

## &lt;注&gt;

<1> 岩田一彦他、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析—3年「社町の桃づくり」を事例として—, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター編), No.5, 1993, pp.143~161.

<2> 岩田一彦他、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(Ⅱ)—小学校4年「山地の人々のくらし—安曇野(穂高町, 豊科町)に湧く良質で豊富な水を生かしたくらし—」を事例として—, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター編), No.6, 1994, pp.67~82.

<3> 岩田一彦他、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(Ⅲ)—小学校3年「ひとびとのくらしと商店—買い物10倍楽しむ方法—」を事例として—, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター編), No.7, 1995, pp.81~94.

<4> 原田智仁他、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(Ⅳ)—小学校4年「菊づくりに生きる沖縄の人々」を事例として—, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター編), No.8, 1996, pp.63~74.

<5> 原田智仁他、子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(Ⅴ)—小学校5年「ビデオ『杉原紙を作ろう』」を事例として—, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター編), No.9, 1997, pp. 61~72.